

本革製品を使って畜産を守ろう！



— 農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄 —

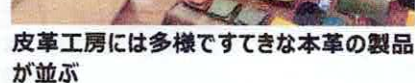
革靴は長年、ドイツのB A R製を愛用していた。東京都西東京市の自宅から1キロほど先に住むSさんがB A Rの日本代理店をしており、アウトドアが趣味のSさんと酒を酌み交わしながら談笑するのが楽しみで、Sさんと酒を飲むたびにB A R製の革靴を買い、使ってきた。ソラマメ型の形で、ゆったりして足指が気持ちいい。

それが、Sさんが都心に引っ越し、気軽に足を運ぶことが困難になってしまった。従って、靴もやむなく最寄り駅近くのスーパーで適当に購入し、軽くて柔らかめの人工皮革の靴にしたところ、歩きやすくていいなと思っていたが、使うほどに風化していくような感じがすると同時に、靴底が滑りやすく、雨の降った日に足を滑らせて転倒し右手の薬指を骨折してしまったのを機に、革靴に戻した。

家内の実家がある長野県伊那市高遠町のA靴店は、販売のみならず製造も行っている工房で、家内が履くB A R製の革靴の修理を頼んでいたことから、一緒に時々足を運んでいた。試しにAで革靴を購入してみたところ、初めのうちは革が硬く若干の違和感があったが、履くほどに柔らかくなって足になじむようになり、風合いも増してすっかり気に入っている。人工皮革は人工皮革の良さがあるわけではあるが、改めて本物の革靴の良さ・味わいを実感した次第。

話は一転するが、皮革は、と畜場で発生した生皮が原皮業者に販売され、そこで生皮に付着した皮下組織や脂肪などが除去されて塩蔵・脱水処理されて、国内外のなめし革業者に販売され、ここでなめされて革となる。革は染色・加脂工程を経て仕上げられ、靴やバックをはじめとする製品に加工され、消費者に販売されることになる。その初めの生皮である原皮の販売価格は、豚皮の場合、この10月の東京市場で、これまでの10円/枚から、2円/枚に価格改定された。2018年にC S F（豚熱）が発生して価格は下落・低迷を続けているが、C S Fが発生する前には180円/枚であった。

価格下落に伴い、原皮業者の調達価格は下がることになるが、原皮業者からなめし革業者への売値の下落は、さらに大きく上回っているという。原皮業者の調達価格2円/枚は廃棄物とはしない最低の価格であり、マイナスの調達価格はあり得ない。従って、原皮業者は下限に張り付いた価格での調達を余儀なくされる一方で、売値下落との板挟みとなって、大幅な採算割れが続き、店じまいを本気で考えざるを得ない危機的状況に置かれている。まさにこのままでは、皮革そのものがなくなりかねない事態にあるといっても過言ではない。



皮革工房には多様ですてきな本革の製品が並ぶ

こうした苦境の背景にあるとされているのが、人工皮革へのシフトとアニマルウェルフェア（動物福祉）という。畜産は、と畜をすれば骨や内臓などの副産物を必ず発生する。肉を食べるのであれば、副産物を廃棄物とすることなく徹底的に利用するのが命を頂いた家畜を成仏させることになり、それこそが本当のアニマルウェルフェアではないか。そして、本物の皮革は、人工皮革以上の良さ・味わいを提供してくれる優れ物でもある。本物をなくしてはなるまい。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入庫、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

〔主な著書〕

「未来を耕す農的社会」「農的社会をひらく」「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）

「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など